近世の油彩の技法と材料

武田恵理

Oil Painting Techniques and Materials in Early Modern Japan

TAKEDA Eri

はじめに
❶西洋における乾性油の利用史
❷油彩とテンペラ
❸近世日本の油彩画の材料・技法史
❹幕末洋風画時代
❺初期洋風画と幕末洋風画の間
まとめ

【論文要旨】

明治以前に関してはなかなか取り上げられることの少ない油絵技法の変遷について、文献と実際の作例からたどった。七、八世紀にはシルクロードを通って伝来した仏教とともに乾性油を使用した描画技法の漆工作品がもたらされた。しかし漆工の一種としてであって絵的には発展していない。

その後、一六から一七世紀に西洋人が渡来し、宗教画の初期洋風画が描かれた。初期洋風画には油彩画や半油性の技術が見られるが、それはセミナリオにおけるイタリア人指導者の美術教育によるところが大きい。セミナリオで学んだ学生らの作品は、国内の美術工芸作品にも影響を与え、確実に定着しつつあった。イエズス会の会章のある《聖ザビエル像》には狩野派の壺印が捺され、一部に半油性の絵具が使用される。狩野内膳に代表される「南蛮屏風」には、膠画でありながらも胡粉による盛り上げや金箔下の赤色下地など、それまでには見られなかった技法が現れる。しかしその後の禁教、鎖国でそれらの技法は下火になる。いっぽう近年発見された日光東照宮陽明門で羽目板下から発見された壁画では、漆地に乾性油で描画されていることが確認された。空白時期と考えられてきた初期洋風画と幕末洋風画をつなぐ時期に建築や工芸などに油絵と漆技法のつながりが見え隠れする。その後幕末の画家は、西洋の実学的観念を国内で再現するため阿蘭陀通詞や本草学者の力を借り身近な知識を取り入れながら試行錯誤し制作した。そのため源内や秋田蘭画は貿易によってもたらされたプルシアンブルーを使用するなど海外との接点が認められる。いっぽう展色剤の処方には唐辛子や樟脳、樒の葉といったオランダに見られない材料が含まれるほか、膠画に油や樹脂を塗って光沢を出すなどの漆工技法との共通性が多くみられる。本稿では、いったん途絶えたかに見える初期洋風画の技法が漆工分野に伝わり、幕末期の洋風画家らのあいだに逆輸入された可能性を報告した。

【キーワード】初期洋風画、幕末洋風画、絵画組成、南蛮美術、油画、テンペラ画